

第2回新しい地域づくりビジョン有識者懇談会

日時：平成 25 年 12 月 26 日（木）10:00～11:30

場所：愛知県自治センター 12 階 会議室 E

＜大村知事挨拶＞

おはようございます。新しい地域づくりビジョン有識者懇談会の冒頭にご挨拶をさせていただきます。委員の皆様方には、お忙しい中、懇談会にご出席いただきましてありがとうございました。奥野座長はじめ、関係の先生方には、それぞれのジャンル、分野、ご専門の立場から、様々なご意見をいただき、ビジョンづくりにご協力いただきましてありがとうございました。おかげさまで、いろいろなご意見をいただき、また、県内の全市町村、国の機関、関係団体なども含めまして、各方面からご意見をいただいたものを集大成いたしまして、今回、素案というかたちでとりまとめをさせていただきました。

このビジョンでは、2027 年にリニア新幹線ができますので、それを踏まえた 2030 年の愛知のあるべき姿をにらみながら、2020 年の目標を掲げていくということで、今回このビジョンづくりをさせていただきました。1 年前に、こういうかたちでつくっていかうという下準備をしてきたのですが、その 2020 年に東京オリンピックが決まりまして、後付けでございましたが、そういう意味ではドンピシャかなということになりました。いずれにいたしましても、今年は 2013 年ですから、これから 7 年後の 2020 年に東京オリンピック、それに向けて我々はどうしていくのか。それからその 7 年後、2027 年にリニア中央新幹線ができますので、それに向けてどうしていくかということで、ある意味で非常にわかりやすい時間軸の中で目標を設定し、取り組んでいくことになると思っています。そういう中で、今日も様々なご意見をいただければと思いますが、首都圏と中京圏がリニアで結ばれれば、5,000 万人の大交流圏になるということでございます。その時に、その 5,000 万人の大交流圏の中で、我々がどういう役割を果たしていくのか。一方で、強力な吸引力を持った首都圏の中に埋もれてしまわないようするためにどうするかということも含めて、様々にご意見をいただければと思っています。

それから、日本一の産業集積ということが、我が愛知の誇るべき地域の力だと思っています。こうしたものをさらに集積をさせていくためにはどうしていくのか。また、こうした経済活動を県民の皆様の豊かさに結び付けていくためにはどうするかということを含めてビジョンづくりをさせていただきました。したがって、「日本一の元気を暮らしの豊かさに」ということを目標キャッチフレーズとさせていただいているところでございます。それから 12 本の政策課題をつくり、その中でも特に、女性の活躍とか障害者支援といったところも、今回柱立てをさせていただいたところでございます。

それから、地域別にも、尾張地域・西三河地域・東三河地域というかたちで、それ

それぞれの地域のビジョンをつくらせていただきました。そうしたことも踏まえまして、今日の有識者懇談会でしっかりご意見をいただき、また、この後も引き続き委員の先生方から個別にご意見もいただきながら、年明けには県議会の皆さまにも説明をしていく機会がございますので、そういうご意見をいただく中で、ブラッシュアップして、1月下旬からパブリックコメントにかけて、今年度末につくるというかたちで進めていければと思っております。そういう意味では、この場で本当に多くのご意見をいただきまして、心から感謝をいたします。また、今日も忌憚のないご意見をいただいて、ビジョンづくりを有意義なものにしていきたいと思っておりますので、何卒よろしくお願い申しあげまして、冒頭のご挨拶とさせていただきます。今日は本当にどうもありがとうございました。

※知事退席

＜奥野座長＞

年末のお忙しいところ、ご苦労様です。

それでは、早速議事に入ります。本日の議題は、「あいちビジョン 2020」の素案についてであります。まず、事務局からの資料説明をお願いします。

〔事務局から資料説明〕

＜奥野座長＞

ありがとうございました。それでは今日が最終回でございますので、委員の皆さまにひとあたりご意見・ご感想をいただいて、それから時間の許す限りディスカッションということにさせていただきます。最初に、内田委員をお願いします。

＜内田委員＞

全体としては、過不足なくまとめていただいておりますので、特に異論はございません。ただ、概要版に入れるかどうかは別といたしまして、分科会でも、ものづくりに特化した愛知県のイメージをある程度、変えていく必要があるのではないかという問題意識を共有しておりました。言うまでもなく、ものづくり文化は愛知県の最大の強みでもあるのですが、将来的には徐々にウエイトが低下していく可能性はあります。従って、特に2020年の東京オリンピックの期間中は、昇龍道も含めた観光での誘客が鍵になると思いますし、それがひいては当地区のものづくりのPRにもなっていくと考えておりますので、愛知県のイメージ戦略やブランド戦略を深化させていく必要があるのではないのでしょうか。そのためには、ブランド構築に繋がるようなアンテナショップの首都圏への展開や、東南アジアなどでの海外展開も考えてはいかなければいけないのかなと感じています。常設ですと非常にコストもかかりますので、期間限定のイベントやキャラバン隊のようなかたちでもいいと思います。トヨタブランドは

世界的にも相当なネームバリューがありますが、愛知県そのものが全国やアジアで広く正確に認知されているのかという点と微妙だと思います。やはり、「愛知県」というエリアで認識してもらうことが重要でしょう。地域別にも、MR J やリニアなどで都市機能を強化する尾張、自動車を中心とした製造業の高付加価値化を目指す西三河、農水産物や観光資源で交流地域を目指す東三河と、それぞれの地域の特徴を国内外にもっとアピールする機会をつくっていく必要があるのではないかと思います。こうした観点から、西三河は質実剛健なドイツに近いイメージもありますし、東三河は農業分野の輸出競争力の高いオランダのイメージにも近く、尾張はリニア効果を最大化できる都市基盤があります。愛知のポテンシャルの高さを適正に捉えてもらえる方向性をどこかに入れ込んでもいいのかなと思います。

<奥野座長>

ありがとうございました。それでは、黒田委員お願いします。

<黒田委員>

最初に、概要版の2ページのところですけれど、中身自体に問題があるわけではないのですが、表現の仕方で、具体例を挙げますと、3の災害リスクのところ、「大きな影響を与えるおそれ」というちょっとネガティブな書き方や、その下でも「地球温暖化がさらに加速するおそれ」で止まっています。その下のリニアの話も、真ん中の項でストロー効果の話が出てきたり、「東京一極集中が加速するおそれ」で止まってしまっておりま。そういう「おそれ」で話を止めてしまうと、読んだ方がすごくネガティブな印象を持ってしまう。そういう「おそれ」に対してどうするかというところまで、もう1行書きこんでいただくと、よりポジティブな印象が浮かぶのではないかと思います。

特にストロー効果の話についてですが、40分という距離は、ストロー効果ではない近さになってしまうので、私が見るところ、ひとつの都市圏の中の多少地域的な分業が進むということですね。今は名古屋と東京がちょっと離れすぎているので、企業にとって、本当の意味での立地の選択の自由がないわけですが、東京から見ると、突然郊外に非常に都市基盤の整備された住みやすく、土地が豊富なところがパッと現れるということになります。前にも申し上げているのですが、今の首都圏と名古屋の地価などを比較すると、東京から名古屋へ、相当数の企業や住宅が流れ込んでくる可能性の方が高いのではないのかと思っております。ただ、金融系とか特殊なサービス業は、まさに一体とした都市圏の中の都心の方に、若干吸収される可能性はあると思いますけれども、どちらかといえば、流れ込んでくる可能性が非常に強い。そういう距離になるのだと理解しております。

それから、エネルギー関係ですと、11ページ、20ページに具体的に新エネルギー、バイオ、省エネ化などの話が出てきますので、そういう言葉をちょっと前倒しで2ページあたりで触れていただければ、イメージが相当違うのではないかなと思います。

また、10 ページに、タイのバンコクにセンターを開設されるというお話があります。ここには書けないかもしれませんが、タイは、ご承知だと思いますが、今、失業率が 0.5%まできており、ほとんど飽和状態で、働きたい人は全て働いているというくらい労働市場がタイトになってしまっています。ジェトロのバンコクの支店でちょっとヒアリングさせていただいたら、今でも日本から次々と企業が来られて、進出の可能性を探ってみえるのですが、なかなか賃金などの関係で、タイの国内はもう難しくなりつつあるということです。ですから、県の方で新たにセンターを開設されるというのは非常にいいことだと思いますが、バンコクを拠点にして、その周辺のベトナムやラオスやカンボジア、さらにもうちょっとするとミャンマーあたりの地域センターのようなかたちで活用される位置づけでお考えになった方がいいのではないかなと思います。

それから、2 ページの災害の話で、南海トラフの話が出てくるのですが、実は、私どもの研究科の勉強会で今月から 2 月にかけて、各分野の専門家の方をお呼びして、防災対策の考え方の議論を始めています。先日、愛知県、静岡県、三重県の防災担当の方に来ていただいて最初のディスカッションをしました。それで、県の方は、さすがに現場をお持ちなので、お話を伺うと非常に地に足のついたお話をされ、各県ごとに対策をとっておられて、個人的には非常に安心しました。ただ、今、ひとつの問題は、去年の夏に内閣府が発表した南海トラフのレポートでは、専門家の方は「レベル 2」と言っていますが、確率的には 1,000 年に 1 回あるかないかという想定を国が大々的に発表しています。実務家の方は、それではさすがに財政的にも対応できないことを分かっていますので、今まで想定した規模である「レベル 1」の対策を現実にはとられるということです。実務家の方はよく分かっているので使い分けているのですが、それが一般市民に伝わっているかという点、非常に混乱を招いているのではないかと危惧しております。また、問題なのは、先日、大阪で震災に対する報告が発表されて、「レベル 2」の 1,000 年に 1 回あるかないかの想定で大々的に発表されています。その後、首都圏の報告では、従来の「レベル 1」の想定で、より現実的な発表をされています。おそらく中京圏についても、近いうちにそういう想定がされますので、このビジョンに書ける話ではないかもしれませんが、注意しなければならないのは、県民の方にその意味の違いや、県がどういう想定でどんな対策を打っていかれるのか、あるいは、それに応じて市町村や町内会レベルでどういう対策を進めてほしいのかということを説明しないと、一般の方は非常に混乱されていると思います。県のほうで、もう少し噛み砕いて説明していただくとよいのかなと思います。

<奥野座長>

ありがとうございました。それでは、後藤委員お願いします。

<後藤委員>

私が関わった県民生活分科会では、非常に活発にご議論いただき、それを多く盛り

込んでいただき、大変感謝する次第です。

今日、お話を伺いながら改めていくつか気付いた点として、黒田委員さんからもご指摘がありましたが、2 ページところで、展望という言葉になっているのに、課題出しだけになっています。本文ではもう少しいろいろ書いてあると思うのですが、概要版では課題だけになっていて、課題と可能性の両方が展望なので、書いていただいたらいいのではないかと思います。

7 ページの図は、大変分かりやすく描かれています。サブタイトルに「暮らしの豊かさに」とありますが、経済活力の向上を、雇用の創出、県民サービスの向上に結び付けていく循環、経済を活性化して暮らしの豊かさに循環させていくということが非常に大切だと思います。分科会では、そのためには人材育成が非常に大事であるということが強調されました。前向きにチャレンジできる人を育てるという教育分野での取組と同時に、これから労働移動が大切になってきますので、雇用の適切な創出も大切です。きめ細やかなライフステージに応じたキャリア支援の仕組みをつくることによって、労働移動をきちんとやっていくことが大事だというご意見がありました。

また、海外展開で得た利益の還元というお話がありましたが、所得の再配分ということを見せること、それによって、豊かな愛知県らしさを示していくことも大事だと思います。ただ、所得の再配分といっても、単にお金をまくということではなく、インフォーマルな分野で、例えば NPO や家族介護をしているような方に具体的に再配分していくことで、本当の意味での長期的な豊かな社会が現れるのではないかと思います。分科会で議論を進めながら、そういうことができていくといいなと思いました。今回のビジョンに、個別具体的なことは書けないかとは思いますが、経済活力をどうやって豊かな暮らしへの好循環に結び付けていくか、雇用の場、人材育成、豊かな社会に結びつくその担い手を育成するようなかたちでの再配分の仕組みを合わせていくと、愛知県らしさが出てくるのではないかと思います、付け加えさせていただきたいと思います。

また、今回、障害者分野や女性分野を柱立てしていただいています、このあたりの分野を、先ほど申し上げたような愛知県らしさと結び付けて、この柱をきちんと発信できるようにしていくことが、これから 10 年 20 年先に、非常に大事なことかなと思います。

<奥野座長>

ありがとうございました。それでは、戸田委員お願いします。

<戸田委員>

何人かの委員がおっしゃったように、冒頭が暗い。読み始めていくと、リニアの光だけ見えるのですが、全般に暗い。これまで愛知が積み上げてきたものを見ると、世界化の中で生きていけるエリアになっています。愛知のライフスタイルができているということ、もうちょっと全般で打ち出されるといいのではないかと思います。

県民の立場と市町村の立場からどう読むのかと思って見ていたのですが、県民の側から見ると、働く場というのが非常に現実的な問題だと思います。これをどうつくっていくのか。25年くらい前は、愛知、大阪、神奈川で、工業従業者数がだいたい同じくらいでしたが、近年までの変化をみると愛知は1割減くらい、静岡も1割減くらいで、これは頑張っているということだと思いますが、大阪、神奈川は半減しています。製造業で働く人がどのように動いていくのかということは、これからも大きな問題で、例えば、田原のトヨタ工場はラインをひとつ閉鎖したということですが、田原の工場の人々が存続運動を起こすというように、働いているということは生活とイコールなので、そこがどう結びついていくのかということがとても気になりました。その中で、革新的な技術を次々と生み出していくという記載があって、これはすばらしい、その通りだと思うのですが、これを現実はどうやっていくのかということです。これは、人材をどうつくっていくのかということとイコールになってくるのではないかと思います。人材をどうつくっていくかということで、企業と大学、大学と高校というように、ぶつ切りでは記されているのですが、企業、大学、高校と教育から働くことまで一貫して考えるような場が必要ではないかと思います。それが、愛知のライフスタイルを守っていく、既に達成できているものを維持していくという点で、ここの圏域の強みだと思います。

もう1点、市町村から見た場合ですが、3ページの図では、首都圏と中京圏が同じくらいの大きさになっています。願望的にはそうですが、実際には、首都圏は4,000万で、こちらは1,000万強ですので、円の大きさがだいぶ違うのだらうという感じがします。それをどう見ていくのか。周辺市町村をどう考えるかということが、県計画としてはあるのではないかと思います。そういう点では、中京大都市圏がちゃんと機能できるような仕組みがいろいろあるのだらうと思います。中京都と言うと、名古屋市と愛知県が強く出てしましますが、周りの市町村とも協議できる場、分権ですから自発的にいろいろなことをできる場が必要だと思います。道州制も、概要版には記載されていませんが、多くの場合は概要版を見ますので、市町村が入れる場ということを入れておくことは重要ではないかと思います。

地域編についてですが、尾張は、名古屋市と愛知県が一緒になる経営の形態が明確に出ていて、東三河は、東三河県庁ということで、県の補完というか、県が一步出るという地域経営のかたちが出ていますが、西三河については明記されていない。県から見て、西三河をどのように県土経営していくのかということが出ると、県の地域経営としてはっきりするのではないかと思います。次に、東三河県庁や、名古屋市と協働するプロジェクトが、本庁の中でどのように評価されていくのかということは、この中で述べることはないのかもしれませんが、気になった点です。

シンポジウムがあって、西三河と東三河を一緒にやりましたが、ビジョンにも三遠南信を書いていたように、東三河は県外向けをずっとやっていました。そういう意味で、県の東のヒンジの役割を果たしていたとは思いますが、西三河と東三河をもう少し一体的に考えるということもあるかなと思います。産業の連動などは既にし

ているわけですし、三河湾と矢作川、豊川、中山間という環境面で、両圏域と一緒に考えていく場もあっていいのではないかと思います。

<奥野座長>

ありがとうございました。それでは、昇委員お願いします。

<昇委員>

基本的には、よくできており、いろいろな意見を取り入れられ、ブラッシュアップされてきたのかなと思います。今日、知事さんはじめ、事務局のお話を伺って、少し思ったことをお話ししたいと思います。

アベノミクスがそうですが、経済を成長させて県民生活の豊かさに還元していくことはいいと思いますが、目標年次の2020年まではそれでいいと思います。しかし、2030年を展望してということになると、少ししんどいのかなと思います。時間軸の捉え方として、人口では愛知県は2015年ころがピークになる。県内総生産でいうと、もう少し頑張っても2020年くらいが、たぶんピークになる可能性が高い。人口が減りますから、2020年以降は、一人当たりGDPを指標として、これは下げない。トータルのGDPは下がるかもしれないけれども、一人当たりGDPは下げないという中で、クオリティ・オブ・ライフ、実際の生活の質をどうやったらいいかということです。だから、2020年までの成長できる間は一生懸命成長しましょう。だけど、そういう成長は、日本全体でもそうだし、愛知でも、いつまでも続くわけではないのです。成長できるときに成長しておいて、今後の成熟社会で、そのストックを生かしていく。人生90年社会ということになるのですが、90年といきなり言われると困るなという感じですね。60歳で退職して、20年あったものが30年になるわけですね。その時間をどうやって過ごすのかというのが、大問題です。だから、成長の果実をストックとして生かしておいて、それを、GDP総体としては減少していく社会に、どういう人生を、それぞれの場所で、ひとりひとりの集計としての地域をどう豊かにしていくのか。そういう視点が総論のところでも少し入っていてもいいのかなと思います。目標年次の2020年までは、最後の成長機会として捉えて、一生懸命成長します。おそらく2030年は、成長という言葉では、なかなか捉えにくい。それは、たぶん、成熟ということになると思います。成熟というのは、まさに環境の問題であったり、ライフスタイルの問題であったり、福祉の問題であったりします。だから、そのところを、計画期間ではないので、メインではなくて、予告編としてもいいのです。今後の成熟社会を充実したものにするためには、2020年までに、最後の成長の機会をきちんと見過ごさないように成長して、その果実の上で豊かな生活をしていく。

知事さんのお話を聞きながら、今頃気が付いたのですが、「日本一の元気を暮らしの豊さに」と言ったときに、「日本一の元気」というフレーズと「暮らしの豊さ」というフレーズがありますよね。この2つのフレーズの関係なのですが、まず「日本一の元気」というのは、すでに愛知県がそうであって、それが必ずしも個人の暮ら

しの豊さにつながっていないので、「暮らしの豊さ」にするという目標なのか、それとも、「日本一の元気」そのものがまだ達成できてなくて、「日本一の元気」にすることも目標で、さらにその「日本一の元気」を「暮らしの豊さ」につなげるという目標なのか。両方の読み方がありうると思うのですが、どちらなのかなということが多少気になりました。データなどを揃えて、どちらなのかを明らかにして、県民に提示したほうがいいのかなと思います。2020年までは「日本一の元気を生活の豊かさに」がメインタイトルですが、ポスト2020年というか、ポスト成長社会、成熟社会のときはどうなのかというのが、透かし彫りで、透かすと少しそれも見えるぐらいの感じであるといいのかなと思いました。以上です。

<奥野座長>

はい、ありがとうございます。私のからも2つ。1つは、概要版について。もう1つは、実施にあたって取り巻く環境的なことについて。

まず、この概要版であります。8ページの「日本一の元気を暮らしの豊かに」までは、非常に分かりやすいと思うのですよ。語尾の問題という話がありましたが、そこはアクションに結び付くような締め方をすればいいのかなという感想はありますけれども。

9ページ以降になってくると、途端にトーンが落ちて、もう分かりきっていることをやりましょうという話がいっぱい書いてある。だから、それまでの夢のところから突然現実に戻されるような気がします。実施する政策が書いてあるのでそうなるのかもしれないのですが。9ページの主な政策の方向性の2つ目の国際交流基盤等の整備に、中部国際空港や名古屋港の機能強化とあるが、これは書いてあることが15年前と同じ。いくらなんでも能がないと思う。これを書くならやめた方がいいと思う。書くのであれば、8ページまでの理念が感じられるようなものを。語尾が暗くて内容がもっと暗いという話になるとね。

それから、その上のリニア開業効果の3つ目に、国土の東西・南北軸となる道路整備とあるが、これもすでにやっていることを一生懸命やりましょうということですよ。これはやればいいのです。これは、8ページから前の話と違うような感じがします。もちろん、それに沿っているのだろうけど、8ページから前の話を実現するためには、何か次の芽になるようなことが書いてあってもいいような気がします。

特に、防災の話では、国のレジリエンスの議論に参加していると、中部がやられて東西が分断してしまうということが、確率的には大したことはないのだけど、起こりうる可能性はあると思います。政府は、その場合に分断される可能性はないのか、名古屋の中でどうなるか、地下鉄の駅にどれだけ水が入ってくるのかとかいろいろやっているのです。次の芽が何か出てくるようなものが何とかならないのかと思う。

それから、10ページの下から3つ目の◆の「あいちスーパーイングリッシュハブスクール」、11ページの一番下の「スーパーサイエンスハイスクール」とあるが、これも聞き飽きた感じがしています。だいたい理系・文系を分けて教育するのはおかし

いのですね。あんなものは明治の遺物ですよ。それがこんなところで実体化してしまって。名大でも理系・文系分けているが、学問内容ではないですよ。雑用をやってもらうために、そういう分け方をした方が便利なので分けているのです。仕事やるうえで、男と女を分けるのは意味がないでしょ。それと同じだと思います。

それから、「スーパーサイエンスハイスクール」ですが、これが何を意味するのか分からないのですが、名大にいた時も、これは何をやるのかと大分議論をしたことがあります。科学技術立国もいいのですが、日本は特許が足りないから停滞しているわけではなくて、むしろ、日本では政治・経済で活躍できる人材が育っていない。それを高校から育てていかなければいけないということで、「スーパーグローバルハイスクール」が始まっていますよね。私はサイエンスハイスクールと同じくらい大事であると思う。イングリッシュは当然であり、県庁に来れば英語が通じるというようにならないといけない。これは、20年経てばなっているはずで、今の若い人が50歳くらいになって部長くらいになると、入ってくる人は普通に英語をしゃべっているけれど、部長さんが英語をしゃべれないということが起こると思うのですけれど、もっと早い段階でなっていないかならないと思います。

それから13ページの2つめの◆にある全国・世界に打ち出せるスポーツ大会の育成・招致とあるが、ど田舎でやっているようなスポーツイベントではないでしょうか。中京大学だって、もうちょっと世界に打ち出せるようなことをやっていると思うのだけでも。とてもではないけど、大規模な予算を持ってらっしゃる愛知県がやるのは、まあやってもいいのだけど、およそ夢がないという感じがしますね。全体的に、8ページまでは非常にいいのだけど、9ページ以降が手堅いと言えば手堅いのだけど、それに対応していないような感じがします。だから、8ページから前のところに対応できるような、ちょっとでも方向性がにおってくるような感じがするといいなと思います。

それから、私がちょっと関わっていることで、実施にあたって取り巻く環境的なことについて申し上げます。1つは多様な主体の参加についてですが、先ほど後藤先生からお話がありましたが、内閣府に共助社会の懇談会がありまして、これは私どもが立ち上げた「新たな公」が、その後「新しい公共」となり、その次に「共助社会」ということになりまして、一昨日とりまとめました。人材面、資金面、それから社会的信頼性という3つの視点でまとめて記者会見をやりました。これに従って内閣府や国交省は、いろいろな政策を打ってくると思います。この議論をやっている時に、共助社会の場を各地につくっていくということが、人材育成でも資金でも出てきまして、埼玉県では、共助社会づくり課というのをつくっています。何をやっていいのか分からないということで、西武信用金庫の社長を呼んだりして一生懸命対応していらっしゃいます。動きが速い。この委員会は、大臣・副大臣・事務次官が全員出ておられます。その場で、アベノミクスは企業が世界に打ち勝ための戦略を言っていると思われるが、そうではなくて、地域一つひとつの課題に関心を持っているのだと言われました。それをここでやるのだということです。いろいろな政策をこれから打ってこ

られると思います。私が言うのは変ですが、報告書は、現状や課題、これから何をやればいいのか非常に分かりやすくまとまっております。この委員会は、これで終わるかと思っていましたが、これからも続けると言っておられました。

2つ目に、まちづくりについてですが、ご案内のとおり、コンパクトシティということがずっと言われていて、いろいろな先生がいろいろなことを言われていて、イメージはいろいろだったのですが、国交省の都市再構築戦略検討委員会で、ある程度絞られてきました。私どもは、「串と団子型」、「あじさい型」と言っているのですが、今は、具体的な政策に落としてきつつあります。多分、今度の1月の通常国会に法律が出てくると思います。名古屋の都市部の栄や名駅などは別ですが、豊橋や岐阜など、名古屋の郊外の都市に当てはまると思います。ひとつは、「串と団子型」ですと、いろいろな生活支援機能を駅周辺に集約していく。そのための政策的裏付けをつくっていく。建ぺい率や補助金の問題など具体的にやっていかれると思います。あるいは、「あじさい型」ですと、中心部のあたりに集約していく。その周辺は住宅が張り付くことを想定しているのですが、外側については調整区域にすることを打ち出されると思います。もちろん、どこに住むかは自由なのですが、特に集合型の住宅をそういうところにつくるとなると規制をかけてくるということになると思います。先週、具体的な話をディスカッションしたのですが、法律的にクリアしていかなければならないことがいろいろありますが、多分、こういう方向で、1月からの通常国会で出してくるのではないかと思います。

それから、リニアについては、先ほど黒田先生からもお話がありましたが、遠心力よりも求心力が働いて、それに対して、行政が果たして答えられるかということを心配した方がよいかと思います。もう1つは、新聞にも出ていますが、大阪の焦りと活動はものすごい圧力です。私の感じる雰囲気では、国交省の方は、省が一体となって、大阪まで早く伸ばすことを推進していく雰囲気にもなっていると思います。この間、国土のグランドデザイン勉強会という大臣プロジェクトがありました。先週は、JR東海の葛西さんに来てもらって、ディスカッションをしました。葛西さんは、国が金を出してくれるのだったらと、しらっと言っておられましたが。国が金を出せるのだったら、JR東海ははじめから自分たちでやりますとは言わない。それができないから、JR東海が自分ところのお金でやっている。どっから金をもってきて、どういうシステムをつくるのか。無利子融資はどうかという話もありました。役所の姿勢はそうだが、自分たちは一生懸命努力するという姿勢でした。仕組みをどうつくるのかということがあるが、数年は早まるのではないか。JR東海がやるにしても、JR東海も努力する姿勢を見せると思いますし、あり得るのではないかなと思います。そんなに早まるとは思いませんが。

大都市圏については、前にお話ししたことですが、子どもが生まれる社会をつくっていくこと。3世代同居・近居は、これからの大都市圏のモデルになっていくと思います。これができるのは、やっぱり名古屋なのです。東京は地価が高すぎて、なかなか3世代同居・近居ができない。名古屋の郊外では、普通にあります。田舎に行くと、

働く場がないので近居できない。東京では、家も狭いし土地も高いのでできない。しかし、東京でどう推進していくのかが大きなテーマになっています。大都市圏の戦略として出てくると思います。

それから、英語については、時間が解決するということもありますが、待っていると、1世代かわらないといけない。すぐに推進した方がいいと思います。私どもの大学でも、事務職員に TOEIC を受けさせています。TOEIC は、800 点は取らないと使い物にならないでしょうね。名大などでも、そういうことをやっていると思います。

長くなりましたが、以上です。

追加のご発言がございましたら、どうぞ。

(発言なし)

局長さんから、それは違うよということがございましたら、ご発言をお願いします。

<知事政策局長>

違うということはありませんが、8 ページまでの記述を、今の時点でなんとか支えるものということで、12 の重要政策課題ごとに政策の方向性を取り上げてございます。9 ページ以降、急に現実的になると言われると、そのとおりですが、今いただいたご意見を踏まえまして検討したいと思います。

また、概要版と本冊の関係もございまして、できるだけ概要版に盛り込みたいと思いますが、分かりやすさということもございます。本冊の方には、いろいろとご意見をいただいておりますので、大体は反映させていただいておると感じておりますが、ご指摘いただきましたので、重要な点はなるべく概要版に入れていくという格好で検討したいと思います。県民の方には、大体が概要版を見ていただきますので、そういう形で努力していきたいと思います。

<奥野座長>

ありがとうございました。

<企画課長>

複数の委員の方から、冒頭の社会の展望が暗いという話がありました。私どもも、このビジョンをつくりながら、本当に明るい展望が見いだしにくいなと感じておりまして、その心が入ってしまいました。本冊の方の 76 ページに、2020 年の愛知の社会経済のイメージとして、数値目標を掲げてございます。この多くで、全国シェアで過去を上回るのだという目標を掲げてございます。県内総生産でございますと、過去最高の 7.3%を上回る 7.5%、製造品出荷額でもしかり、輸出額でもしかり、それから学術・開発研究機関事業所数についても、これまでを上回っていくのだという形で、日本一の元気ということで、さらに高みをめざしていくという気持ちを表してござい

す。

それから、労働力人口、労働力率、健康寿命、平均理想子ども数と平均予定子ども数の差については、個人の面からも、社会の面からも、これからの人口減少社会をどう支えるのかという観点から、かなり意欲的な数値目標を掲げたつもりでございます。そういう意味で、目標はいいが手段の方はという、奥野座長のお話にはお答えできませんが、私どもとしては、そういう気持ちで頑張っていきたいと思っております。

<奥野座長>

ありがとうございます。

<戸田委員>

質問ですが、76 ページの県民の幸福感はどのように測る指標でしょうか。

<企画課長>

これは、県政世論調査で、今のあなたの幸福感を 10 点満点でつけると何点になりますかという点数でございます。その平均が 5.7 点だったということでございます。

<戸田委員>

今、幸福指標が流行っていきまして、内閣府もお出しになったのですが、愛知ならではの幸福感がでるのだとしたら、面白いかなと感じました。

<奥野座長>

それでは、知事の挨拶にありましたように、これからも委員の方に意見を聞く機会があるということですから、引き続きよろしくお願いいたします。

本日の議論を受け止めていただきまして、日本一の元気が出るようにとりまとめていただければと思います。

それでは、本日の議事はこれで終了します。ありがとうございました。

<知事政策局長>

ありがとうございました。知事も申し上げましたが、懇談会の座長を務めていただきました奥野先生、分科会の座長も務めていただきました、後藤先生、内田先生、黒田先生、それからシンポジウムのコーディネーターも務めていただきました昇先生、戸田先生、大変お忙しい中、7 月の第 1 回会議以降、熱心にご議論いただき、また、本日もご議論いただき、ありがとうございました。

今後は、知事も申し上げましたが、年明けから議会へ素案を説明させていただき、ご意見をいただいてまいります。そうしたご意見を踏まえ、1 月下旬にとりまとめて、パブリックコメントにかけてまいります。その間、各先生方には、本日のご意見を踏まえまして、いろいろとご相談させていただきたいと考えておりますので、よろしく

お願いしたいと思います。懇談会は、今回で終了となりますが、引き続きお願いしたいと考えております。いずれにしても、このビジョンをしっかりと策定してまいりたいと考えておりますので、よろしくお願いいたします。

これをもちまして、本日は閉会させていただきます。大変ありがとうございました。